

(右) 麴の手入れをする富田酒造15代蔵元、富田泰伸氏。

(中上) 休憩時間に“おやっさん”自ら酒林を作る。神沢川酒造、山影純悦杜氏。

(中下) 甕から蒸し上がった米を放冷機に移す。手前は若林酒造、山口竜馬杜氏。

(左) 出来た！一升瓶を持つ顔に喜びがあふれる。神沢川酒造5代目蔵元、望月正隆氏。



空にまだぼんやりと  
星が灯る冬の朝、酒蔵  
は目覚める。

釜屋は米を蒸し、甕  
廻しは甕に権を入れ、頭は醪  
を仕込み、麴師は室で麴のご  
機嫌をうかがう。冷たい蔵の  
空気に職人たちの熱気が立ち  
込める。

凍てつく冬、酒を醸すこと  
のみに差し出された手は、煩  
悩を打ち砕くかのように次か  
ら次へと作業を進める。

蔵人たちの長は杜氏。酒造  
りの技術だけではなく、判断  
力や統率力、管理能力まで求  
められる、いわば酒蔵の将軍。  
微生物の言葉に耳を傾け、伝  
統を伝え、人の和を築く。

日本には、休みも、昼夜の  
区別もなく微生物と過ごす冬  
がある。過酷な文化に魅入ら  
れた人がある。誇れる酒があ  
る。ひと冬を、全人生のよう  
に生きる人がいる。



## 心を染めるエロティックシーン

平成16年(2004)、米と米麴のみを原材料としても70%より小さく精米しなければ「純米」と表記できなかったそれまでの基準は撤廃され、低精白純米酒が産声を上げる。地米、玉栄が、「七本鎗」の個性ともいえるしつかりとした輪郭を演出する。米の力で攻め込まれると同時に、その食中酒として果たす役割に驚かされる。特に肉料理では、肉の種類を問わず各々が持つ香りと甘みをガツチリ掴んで逃さず、しかも自らと融合させるしたたかさを忘れない。激しく主張しながらも同時に素晴らしい順応を見せる、80%だからこそ成しえた主義ある食中酒だ。

[七本鎗]

使用米/玉栄

精米歩合/80%

使用酵母/きょうかい7号

価格/1800ml 2625円、720ml 1310円

富田酒造株式会社

滋賀県長浜市木之本町木之本1107

☎0749-82-2013

http://www.7yari.co.jp

賤ヶ岳七本鎗……。7人みんな名前知ってる？ 天正11年(1583)、秀吉傘下の7人の若武者が、血湧き肉踊る躍動を見せた合戦、賤ヶ岳の戦いが繰り広げられた北近江木之本町。整然と静まりかえったこの地に、四百有余年前の血の雨は跡形もなく消えている。北陸はもちろん、京都や東海への分岐点であった木之本は、古くは宿場町として栄え、交通の要衝として賑わいを見せていた。新しい家屋と、百年は優に経っているかと思われる家屋が違和感なく混在する町並みの一画、旧北国街道に面して、富田酒造は佇む。創業四百五十余年。かの魯山人もこよなく愛した「七本鎗」はここで醸されている。趣のある

\*1 [賤ヶ岳七本鎗]

羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)と柴田勝家による賤ヶ岳の戦いで、勝利した秀吉方で功名を挙げた7人の武将や家臣。加藤清正、福島正則、片桐且元、脇坂安治、加藤嘉明、平野長泰、糟屋武則。



Principle 鮮やかな主義

七本鎗

しちほんやり

「富田酒造」滋賀県





1974年に生を受けた15代目蔵元・富田泰伸氏の榎入れ。



室温30℃を超える麹室。押し寄せる熱気の中での麴米の手入れ。



12月、掛け替えられたばかりの酒林が青々と茂る。



北大路魯山人の手による扁額が、訪れる酒徒を迎える。



陽射しを透かすステンドグラスは、蔵元泰伸氏の姉・綾子さんの手作り。

……などというありきたりな言葉では足りない、この国が古より繰り返してきた興亡を垣間見ることが出来る蔵家屋は竣工延享元年（1744）、坂の途中に建つ。斜面に建つ蔵は、それゆえ蔵人に過酷な労働を強いる。傾斜は要塞、いつの時代も人を守り、人を苛める。浮き立つ旅人の爪先を掴まえる街道の石畳は、静かに、だけでも鋭く確実に湖北の時間を刻み、この地を訪れる者の表向きだけの気力を、無表情のまま氷の世界へ閉じ込めてしまふ。空、水、路面、建ち並ぶ家々……。ここにあるものすべてが怖い。

「目には見えない、染みついたミッシヨンのようなものがあつた」。15代当主・富田泰伸氏が、家業を継ぐことを決意したのは27歳の時。近江源氏・佐々木京極氏を祖とし、俊豪輩出の誉れ高い富田家の当主となつた瞬間から、戦火や天災を免れ奇跡的に残つた古い蔵家屋を大切に、そこで酒を醸し続けることを第一義としている。魯山人の雄飛な心技を打った酒とはどんな香味を持っているのだろうか？

それは、時のささめきを封じ込め、扇情的ともとれるボディが、プリミティブに、シンブルに五感を突き抜ける。毛羽立つような富の顕示とは無縁な抑制の香味は、生と死を隣り合わせに置いた武士たちの潔さ。激しさの中の順応性は、高い理性に培われた独自の世界観。決して押しつけることなく貫かれてきた鮮やかな主義を前に、毀れた唇はただただ無力だ。繋ぎ止められることを望むように、繰り返し耳を傾ける精霊たちの言葉がErosと化して内臓を掻き立てる。私は此処に何をしに来たの？

北近江……木之本……七本鎗……。

囁くように上がる古の叫びが、心を染めるエロティックシーン。



\*2[魯山人]

北大路魯山人（きたおおじろさんじん、1883～1959）。芸術家。書、絵画、陶芸の大家である一方、料亭「星岡茶寮」を主宰するなど料理家・美食家として知られた。